

井関弘太郎先生のご逝去を悼む



「ぼーとおぶなごや」にて(1993.8.20)

名古屋地理学会のすべての会員の皆さんがご存知のように、永らく本学会の会長を勤められ、わたくしたちを指導してくださった井関弘太郎先生が平成14年6月27日、永眠されました。享年は77歳でした。告別式が行われた29日は、きしくも名古屋地理学会の総会と例会が行われた日に当たっていました。昨今の日本人の平均寿命を考えればもっとお元気でいていただきたかったし、もっと長く私たち名古屋地理学会をご指導いただきたかったと心から思います。

井関先生は平成5年まで、15年もの長きにわたって名古屋地理学会の会長を勤められました。この間、よほどのことが無いかぎり例会があればいつも出席され、最前列に座られてじっと発表に聞き入っておられました。発表が終われば、適切なアドバイスや、時には厳しいご意見を述べられるのが通例でした。「巡検」が名古屋地理学会の重要な活動の一つとして年間スケジュールのなかに位置づけられ、定着したのも先生の地理学に対する考え方、見識が反映したものです。

年1回の巡検には、お元気であった頃の先生は、たぶんただの1回も欠席されたことは無かったと思います。巡検ではその時々コースによってもっとも適任の案内者が説明しますが、先生はそんなことは関係なく、どのコースの巡検でもマイクを持って博識、見識を示されました。たしか先生が参加された最後の巡検の時ではなかったかと記憶するのですが、東海北陸自動車道を通っての帰り道、やおらマイクを取った先生が、「今バスは を 通っている。ここを通っているのだが

ら××について説明しなければならない。」とおっしゃったことがありました。実に厳しいご指摘だと思ったものです。2年か3年前から、先生がご体調を崩されて、例会でも巡検でも先生のお顔が見られなくなりました。巡検が終わってバスを降りた参加者の1人が、「井関先生がいらっしゃると、ちょっと緊張するのだが、いらっしゃらなければいらっしゃらないでちょっと淋しい」と独り言のように言っているのが耳に入りました。まったくその通りだ、と思いました。

先生はご自身が専門とされた自然地理、第四紀学についてはもちろん、人文地理の諸分野についても実に広く、深い知識と見識を備えておられました。わたしがひそかに思っていることは、井関先生のようなタイプの地理学研究者は、これからはもう出ないであろうということです。指導を受ける立場からすると、やさしい井関先生とこわい井関先生の、二人の井関先生がおられました。やさしい時は本当に温和な笑顔に接することができました。こわい時は一同、なにか体を緊張させて……。わたしがはからずも会長を担当させていただくことになった時、先生が、山田さん、これから名古屋地理学会をよろしく願います、と一言おっしゃいました。それを今思い出して、内心忸怩たるものがあります。

井関先生のご冥福を心から祈ります。

名古屋地理学会前会長、愛知県立大学

山田正浩

韓国特集 - 日本の韓国・韓国の日本

渋谷鎮明^{*1}

今回の例会は日韓ワールドカップの期間中でもあることから、山元貴継氏(名古屋大・院)、尹大辰氏(名古屋韓国学校)を報告者に迎え、「韓国特集 - 日本の韓国・韓国の日本」と題し、名古屋市教育センター分館(教育館)にて研究報告会を行った。

山元貴継氏は「日本にいちばん近い街 - 韓国・釜山の都市誌」について発表を行い、開港期より現在に至るまでの釜山の変化と、都市開発・温泉開発などの植民地期のさまざまな日本人の関与、近年の日本人観光客の影響など、さまざま

な日本人の影響について述べた。

尹大辰氏からは「名古屋におけるコリアン」の題で発表をいただいた。ご自身の名古屋韓国学校などでの経験を踏まえつつ、日本における在日コリアンの形成と人口増加についてその概要を示した上で、戦前から現在に至る名古屋での詳細な状況やさまざまな問題について述べた。また今回のW杯が日本人にとって、在日コリアンというきわめて身近な「隣人」を理解する大きな契機であることなど、今後の展開についても触れた。

日本に一番近い街 - 韓国・釜山の都市誌 -

山元貴継^{*2}

毎年多くの日本人観光客が、首都ソウルをはじめとした韓国を訪れるようになった。しかし、韓国にはソウルのほかに、最も日本と近く、かつその歴史において、長く日本との関わりを持ってきた都市がある。それが、朝鮮半島南東端に位置し、人口約 380 万人(韓国第2位)を抱える都市、釜山広域市(以下釜山市)である。今回の発表では、この釜山の街をめぐって、街の生い立ちと、そこに大きく関わっている日本との関係について紹介した。

釜山の都市誌を理解しようとする際には、その街の発展の中心が、内陸部と海岸沿いとを結ぶ「南北軸」に沿って移り変わってきたことに注目すると良い。その段階は、以下のように分けることができる。

1. 内陸部から海岸沿いへ(李氏朝鮮時代)

李氏朝鮮時代(1392 ~ 1910 年)の末期まで、現在の釜山市に相当する地域の中心は、内陸部の東萊<トネ>地区にあった。東萊地区の中央部は当時、「東軒」と呼ばれた行政機関が設置され、周囲を囲む城壁が築かれた「東萊邑城」となっており、同城には、豊臣秀吉による朝鮮出兵の際に、進軍してきた日本兵に対抗して、兵士を含めた住民が立て籠もって戦ったとの記録もある。しかし李氏朝鮮時代の末期

になり、日本から開国を求められるようになってくると、東萊地区から 10 数 km 南下した海岸沿いに、日本人使臣のための「倭館」などが設けられた。そして、それまで幾つかの漁村が点在するに過ぎなかった「富山 プサン 浦」は、「江華条約」に基づく開港地に指定されて「釜山 プサン」と改められ、そこには多くの日本人が移住してきて街を形成していった。

2. 発展する海岸沿い・観光地化する内陸部 (日本統治時代)

日本統治時代に入ると、東萊地区が行政中心地域としての機能を失ったのと対称的に、埋め立てもあって整備の進んだ海岸沿いの釜山港周辺は、一帯の中心地として「府(日本の「市」に相当する)制」がしかれるようになった。「釜山府」へは、日本(下関・大阪など)からの連絡船の着く「釜山港」を通じて、多くの日本人の移住が続き、港の周辺には、日本式家屋や当時日本本土で流行していた洋式建築が次々と造られ、日本と見間違ふかのような町並みが築かれていった。一方で、一時は衰退をみた東萊地区では、旧「東萊邑城」からみて西側の金井山麓で温泉観光地の開発が進んだ。なお、同地区と海岸沿いとを結ぶ軽便電車も設けられ、日本人を

*1 中部大学

*2 中部大学

含めた多くの観光客が温泉に訪れるようになっていった。

3. 内陸部のベットタウン化(朝鮮戦争後)

独立後、多くの日本人が日本本土に帰還してしまい、いったんは日本との交易も閉ざされた貿易港「釜山港」は、その役割を失ってしまった。しかし、まもなく 1950 年に朝鮮戦争が勃発すると、釜山市(釜山府を改称)には、戦火を逃れて多くの避難民が押し寄せて、臨時首都までが設けられた。そして、その後も釜山市は海岸沿いを中心に成長し、市の人口は急激に増加し続けた。そして、その人口を分散させるために、1960 年代の軽便電車の廃止後は必ずしも交通の便が良いとはいえなくなっていた、内陸部の住宅地開発が進行され始めた。とくに、1985 年から段階的に開通していった地下鉄が内陸部と海岸沿いとを結ぶようになると、東萊地区をはじめとした内陸部は、高層アパートが立ち並ぶベットタウンと変化していった。今では、東萊地区(現在「東萊区」)は、東萊温泉という観光地を抱える一方で、釜山市内でも最も人口密度の高い地区の一つとなっている。

4. 海岸沿いへの再照明と「南北軸」の強化

(1990 年代以降)

すでに 1960 年代以降、日本人観光客の韓国渡航は段階的に自由化され始め、日本の下関とを結ぶ「釜関フェリー」などを通じて少しずつ人々の行き来が行われるようになった。しかし、1993 年代以降の日本人観光客に対する事実上のビザ解禁や、同時期から定期運行され始めて、日本の福岡とを 3 時間あまりで結ぶようになった高速客船「ビートル号」の出現は、とくに西日本の人々が釜山に気楽に渡れる状況を作り出した。こうした中で現在、多くの日本人が、港近くの中区「中央 チュンアン 洞」や、その南東にある釜山の中心街「南浦 ナムボ 洞」などを訪れるようになり、これらのショッ

ピング街はにぎわいをみせつつある。一方で、地下鉄の開通で便利になった「南北軸」の中で、東萊地区と海岸沿いの中間地点にあり、交通の結節点となっている「西面 ソミョン」の発展も著しい。



図: 釜山広域市のガイドマップ ヘムン出版社

最後に、名古屋地理学会での発表時には開催中だった日韓共催のワールドカップは、東萊温泉のすぐ南側の社稷サジク 洞競技場(図 2 の)などを会場として無事閉幕した。さらに釜山市は、市庁をこの競技場からさほど遠くない所に移し、その発展の中心を再び内陸部の方に向けつつある。今後、韓国と日本との関係がどう推移するかは分からないが、その中でここ「釜山」という都市がどのように発展していくのか、今後も注視していきたいものである。

知多半島中部におけるため池の分布とその自然環境 - ため池をめぐる人と自然の関わり -

富田啓介^{*1}

1. はじめに

愛知県知多半島には、近世よりの活発な新田開発にともない、大量のため池が築造されてきた。その数は、一説に9600とも言われ、香川県や兵庫県南部など瀬戸内地方に匹敵するため池稠密地帯となっている。こうしたため池は、引水可能な大規模な河川が存在せず、旱魃が多発した知多半島にあって、貴重な灌漑施設であったほか、伝統的な管理によってその本体や周囲は、希少種を含めた多種多様な生物が生息するハビタットとして、重要な役割を果たしてきた。ところが、1961年に愛知用水が知多半島に通水すると、その存在意義は急速に低下した。結果、この地域のため池の多くは放棄されるようになった。また、同時期に始まった圃場整備や、名古屋のベッドタウンとしての人口増大にからんだ、丘陵地の宅地造成による地形改変で、多くのため池が潰されてきた。この急激な変化の中で、周囲の自然環境も大きく変化している。こうした、周囲の自然環境を含めた、近年のため池の増減や分布様態を正確に把握することは、知多半島

の生態系の現状を考察し、なんらかの政策を打ち出す上で、非常に大切になってきている。そこで今回は、知多半島の中部にある半田市および阿久比町をモデルとして、ため池台帳の解析と踏査を行い、都市近郊における、ため池地帯の現状を明らかにした。

2. 方法

対象地域における最新のため池の基礎資料は『農業用ため池台帳』として1998年に愛知県農地開発事務所がまとめている。今回は、まず、この資料(以下『台帳』と表記)に記載されているため池(対象地域のため池のほぼ全数が記載されている)を対象に、属性として記載されているその所在、所有者、規模などの情報を統計的に分析したほか、GISを用いて地図上にプロットし、分布様態を観察した。さらに、2001年10月から2002年4月(一部は2002年11月)にかけて全数を踏査し、存在状況、消滅した場合の理由、周囲の土地利用パタン、護岸率を調べた。

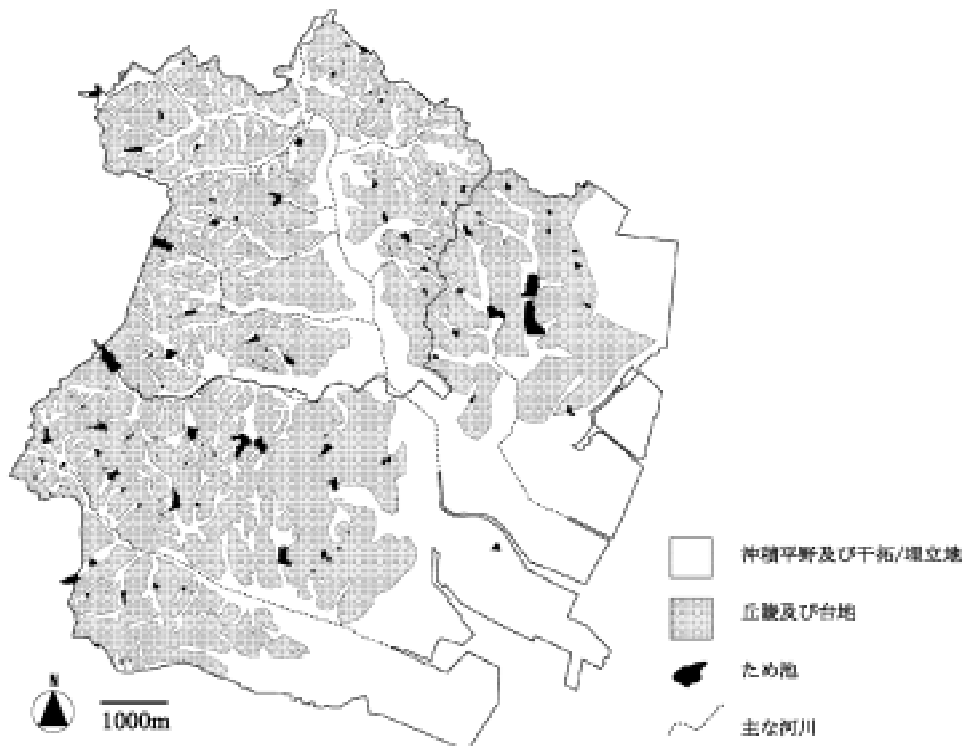


図1 半田市(右下)と阿久比町(左上)におけるため池の分布
(半田市及び阿久比町の都市計画図、国土調査資料などを用いて作成)

*1 名古屋大学文学部学生

3. 結果

(1) 分布状況と近年の増減

台帳によれば、ため池は、半田市に 105 ヶ所、阿久比町に 162 ヶ所の計 267 ヶ所が存在しており、多くが丘陵や台地に陥入している小規模な開析谷(いわゆる谷戸)の谷頭部あるいは中央に位置していた。水面の標高はおよそ 30 ~ 50 メートルであった。分布には偏りがあり、予測された通り、阿久比町南部や西部の各一部に残された未整備の農業地帯に小規模なものが集中して分布しており、住宅地、圃場整備された水田地帯にはほとんど分布は見られなかった。また、今後宅地化や圃場整備が始まるだろうスプロール地帯にも、相当数のため池が分布していた。

消滅していた池は、全体の 20.6 %にあたる 55 ヶ所あり、半数強が管理放棄による荒廃や土砂堆積によるものであった。のこりは、道路拡張や土地造成による直接的破壊によるものだった。小規模な池ほど消滅する割合が高く、1000 立方メートル未満のものでは、全体の3分の1近い 30.0 %が消滅していた。

(2) 池の規模

対象地域のため池は、半田市の大規模な浅い谷にある一部の例外を除き、全体としてごく小規模な池ばかりであった。貯水量を見ると、1万立方メートル未満の池が 83.9 %を占め、中央値(メジアン)は 300 立方メートルだった。貯水量と満水面積は強い相関を示しており、面積的にも小規模な池が多かった(中央値 0.1 ヘクタール)。調査対象とした池の中で最も小規模なものは、人が飛び越すことのできそうな大きさのものもあった。

同様に受益面積を見ると、最大でも阿久比町西部にある草木池の 63 ヘクタールで、1ヘクタール以上の受益面積を持つものは全体の 21.3 %しかなかった。一方で、受益面積をまったく持たない、つまり灌漑用としてはすでに使われていない「死にため池」が全体の 65.5 %も存在していた。これは、半田市を中心とした住宅地はもちろんのこと、ため池の多く残された未整備の農業地帯でも相当数が分布していた。

(3) 池の所有者

ため池の所有者は、全体の 65.2 %が個人単独で所有しており、次いで市・町有のものが 14.2 %、神社有のものが 7.9 %とこれらの所有形態で 9 割弱を占めた。そのほか、連名での共有、区や大字、企業、国、県、協同組合などの所有が見られた。伝統的なため池の管理組織である「組」の所有も数箇所あった。規模別に見ると、大規模な池ほど市・町や神社などパブリックな所有形態が多く、小規模な池ほど、個人単独のようなプライベートな所有形態が多いという傾向が見られた。

(4) ため池周囲の自然環境

ため池周囲の自然環境として、護岸されている割合(護岸率)と、後背地・堰堤・前面(受益地域)がどのような土地利用であるか(周囲の土地利用パターン)を調査した。護岸されていないほど、植生や地形の凹凸など生物の生息空間が残っており、生物多様度が高いと判断できる。土地利用パターンは、伝統的な「後背地:森林、堰堤:低茎草地、前面:水田」というパターンが、多様な生物の生息環境を生むことによって生物多様度を上げているという研究成果があり、このパターンが残っているほど自然環境の状態が良好であると判断できる。

まず護岸を見ると、池が存在し、かつ現地調査が可能だった 185 のうち、69.7 %がほとんど護岸のない状況で、予想以上に護岸されていない池が多かった。ところが、大規模な池では半分以上、あるいは全面的に護岸されている池が 55 %を占めていた。また、市街地の池は多少の例外を除いてすべて護岸されており、未整備の農業地帯ではほとんどが護岸されていなかった。

次に、土地利用パターンを見ると、未整備の農業地帯においても、伝統的なものから大きく崩れている場合が多かった。例えば、後背地が宅地化しているものが調査可能だった池の 18.9 %存在していたり、堰堤が藪になっているものが 42.9 %存在していたり、前面が休耕田、あるいはそれが遷移した藪となっているものが 9.1 %存在していたりした。ひどいものでは、谷戸全体が藪化しているものも数例あって、ため池が残存していても周囲の環境が大きく変化してしまっていることがわかった。

4. 考察

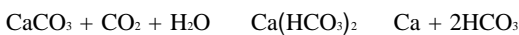
いわゆる「里山」の荒廃や開発による破壊による、都市近郊地域の生態系の危機が叫ばれているが、知多半島におけるため池も、まさしくその渦中にあった。生態系の荒廃にかかわる研究は、生物学において、それそのものを直接扱ったものが多いが、今回の研究によって、ため池の消長という、生態系を載せている「器」の調査からも、その危機が裏付けられた形となった。大規模なため池は、愛知用水の貯水池、洪水用の調整池、周囲の環境も含めた公園化などによって、現在でも利用価値のあるものが多く、灌漑用としての役割を終えてからも、継続して管理・利用されているものも多い。しかし、今回の調査で明らかになった、生物多様度の点から見て、比較的良好な状態を保っている、未整備の農業地域(里山)における小規模なため池は、そのような利用は難しく、注目もされないまま次々と消滅している。こうした池の周囲には、都市近郊では希少となった動植物が生息している例も多々あり、この状況が明らかになったことで、周囲の環境も含めた総合的な保護策が取られることを望みたい。

カルスト地域の水の流出 - 鈴鹿山脈北東部を事例として -

溝口晃之*2

鈴鹿山脈の北部には、石灰岩が広く分布し、ドリ・ネ・石灰洞(鍾乳洞)・カレン(ラピエ)・カレンフェルト(石塔原)など、カルスト地域に特有の地形がみられる。ここに源を発して伊勢湾に注いでいる員弁川の最上流部において、小さな支流の河内谷川が員弁川の右岸に合流している。以後、河内谷川との合流地点より上流の員弁川の本流を単に員弁川という(図1～図2)。

この2つの支流の流域は隣接し、その流域面積はいずれも数 km² しかないので、2つの流域の間には、降水量・蒸発散量・地形・地質・植生・土壌などの河川の流量や水質に影響を与える諸条件には大きな差異はないはずである。ところが、筆者が当地域で水文学的な調査を行っていくうちに、2つの河川の間には河川流出量に大きな差があることが確かめられた。また、ハイドログラフの分析から、河内谷川には地表水以外の水が含まれている可能性があることも明らかになった。そして、水温・水素イオン濃度指数・電気伝導度・水質の調査結果に照らし合わせると、地表水以外の水とは、員弁川流域から地下を通して河内谷川流域へ移動している地下水であると判断した。この地域がカルスト地域すなわち石灰岩地域であるので、

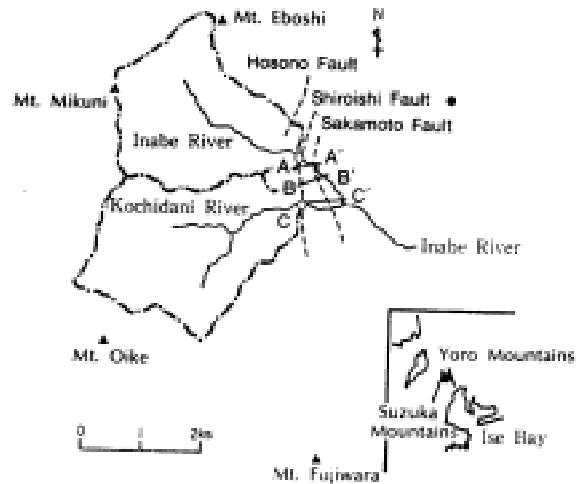


という化学反応(化学的風化作用=溶食作用)がさかに行われている。しかもこの地域にはいくつかの断層が存在している。このため、この地域には多くの石灰洞(鍾乳洞)が分布していることが確認されているが、この石灰洞(鍾乳洞)が地下水の移動の経路になっている可能性が高いと思われる。

ところが、詳細な分析を加えていくうちに、次のような課題が見つかった。

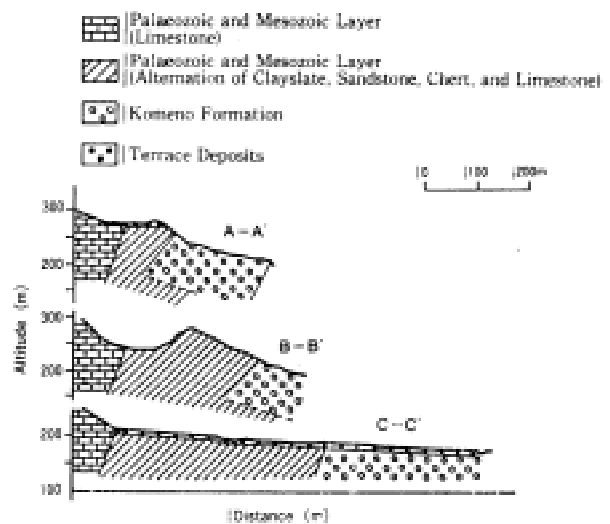
一つ目は員弁川流域から河内谷川流域に地下水が移動している証拠を示すことが必要である。それはトレーサー調査を行うことによって可能になると思われるが、トレーサー調査を行うには対象地域が広すぎるので、うまく調査できないのではないかと懸念は残っている。二つ目は2つの河川以外の流域との関係を詳しく調査することが必要である。三つ目は、地下水の移動を調査するためには、降雨の影響が

少ない渇水期に流量の観測を多くの地点で行うことが必要である。そして四つ目は、降雨の応答、減水特性、水収支など、河川の流出特性を明らかにするためには、水位計を設置して連続観測を行うことが必要である。



○ : Observation point of Specific Discharge, Temperature, Water Temperature, and Water Quality
● : Observation point of Precipitation

図1 調査地域の概観



The location of the profile of A-A', B-B', and C-C' is shown in Fig. 1

図2 調査地域の地質断面図

出典: 溝口晃之・原昭宏(1997)による。

*2 愛知県立津島高等学校

筆者が、当地域で調査を行っているとき、土地の古老から冷川という特異な河川の存在を耳にした。冷川は河内谷川流域の南側に隣接している小さな河川で、その名が示すように、夏季の水の冷たさは格別で、夏季でも川の中に長く入っていることが難しいといわれてきた。

そこで、2002年の8月1日～8月4日に員弁川と河内谷川に冷川も加えて、前述の課題を解明すべくさらに詳細な調査を行った。ここでは、従来の研究の結果に加えて、いくつかの判明した事実を報告したい。

員弁川と河内谷川の調査の結果から、員弁川の右岸と河内谷川の左岸に注目し、流出している地点(地下水の移動の経路に相当)を見つけようとしたが、今回の調査では発見できなかった。また3つの河川をそれぞれさらに小さな流域に分けて、小流域ごとの河川流出量・水温・水素イオン濃度指数・電気伝導度を測定した。合わせて、現地で採水し、それをイオンクロマトグラフによって溶存成分の分析を行った。

小流域ごとの河川流出量が急激に増加したり減少したりしていると、それは隣接する流域からの流入や隣接する流域への流出を考えなければならない。これと同様のことは、水温・水素イオン濃度指数・電気伝導度・溶存成分の測定値が急激に変化しているときにもあてはまる。溶存成分の結果については現在も検討中であるので、河川流出量・水温・水素イオン濃度指数・電気伝導度の4項目の測定結果から、考えられる地下水の移動の方向を推定した(図3)。地下水の移動の方向の推定については、河川流出量・水温・水素イオン濃度指数・電気伝導度・溶存成分のすべての項目を総合的に考察しなければならないことはいままでもないが、その結果については別の機会に譲りたい。

カルスト地域では、石灰洞(鍾乳洞)が発達しているため、地形的な流域と地質的な流域とが一致していないことが予想される。その結果、分水嶺を越えての地下水の移動が生じる。これを扱った研究例は筆者が知るところでは、ほんの数例しかなく、研究方法などが十分に確立されているとは言い難い。今後は、先にあげた課題の解明に向けて、さらに詳細な分析を行いたい。

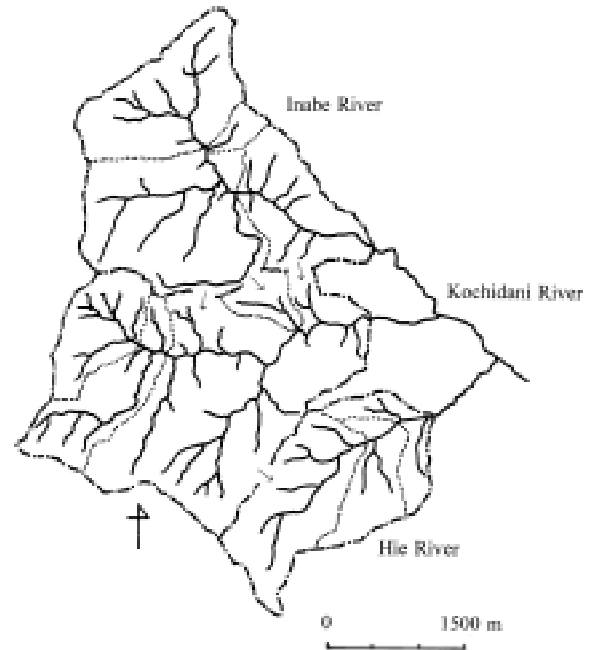


図3 推定される地下水の移動方向

文献

溝口晃之・原昭宏(1997):三重県員弁川上流域における隣接した2支流間の水の交流. 地域研究 37-2

新中学校社会科地理の諸課題

- 概念と社会認識深化の分析から -

酒井喜八郎^{*1}

・新中学校社会科地理

「身近な地域」の学習において大切なこと

地理の指導観が転換した。「学習指導要領、教科書は基礎・基本を示すものとされ、それを基礎としてより大きく学力を伸長させることが求められるようになった。また、「知識重視から学び方を学ぶ学習の転換が大きく図られた。」これは大いに歓迎されることである。しかし、忘れてはならないことは、学び方を学ぶことをとおして、地理的な見方・考え方がしっかり培われるようにしていくことが大切である。

では、「地理的な見方とは、何か？」地理的な見方とは、「社会事象間の因果関係がわかること」である。では、「地理的な考え方とは何か？」「地理的な考え方とは、地域の問題を総合的な視野から判断し未来予測する力」である。そのためにも地域を理解するために、時間軸を組み込むこと、質の高い概念探求を目標とすること、が「身近な地域」の学習においても重要となってくる。

全国中学校社会科大会(東京 2000、大阪 2001、栃木 2002)に参加して授業を見て最近の実践のよいところは、生徒が意欲的に調査活動をする場面が見られるようになった。

東京(自販機の分布図を生徒が作成)、栃木(りんごなどの日本の分布図から問題発見)

最近の実践の問題点としては次の4点があげられる。

「身近な地域」の追求課題が興味深く追求に耐えうるものであるかどうか？

追求課題のつかませ方

地形図の利用・景観観察が十分に行われているかどうか？

生徒のグループ学習の仕方・方法などの研究の必要性

・私の地理教育研究

この10年間、概念と社会認識の深化構造の分析を中心に行っている。主な論文は次の3点である。の提案も、概念と社会認識の深化構造分析がもとになっている。

1. 「食を主題とする社会科授業の設計 - 生活文化教材

の科学化をめざして - 」(1994)

兵庫教育大学院修士論文 生活科・総合科などで、「生活」の鍵概念が導入され、活動重視になっていく中で科学性の欠如という問題が出てくる。身近な食を通して、科学的な社会認識深化をめざすにはどうしたらよいかを考えた。

2. 「生活文化学習」の科学化へのアプローチ - 社会科学者の思考分析と授業設計への援用について -

「地理学報告」vol.88 June.199 pp107-116

3. 科学化をめざす「生活文化」学習の授業展開 人類学の成果の援用と時間軸を導入して - 全国社会科教育学会「社会科教育論叢」第42集 1995 pp53-64

・概念と社会認識の深化構造の分析の事例について

当日の発表では、「概念と社会認識の深化構造の分析フレームワーク」についてパターンを紹介した。

新学習指導要領と教科書の新しい動向

- 地理A地理Bの教科書を通して -

吉田與一郎^{*2}

今回の発表では、新学習指導要領の実施にともない、来年度から使用される高校地理A・Bの教科書に見られる新しい動向を明らかにしていくとともに、今後の高校地理の指導のありかたにも言及することとする。

まず今回の学習指導要領の改訂では、地理・歴史科の全体目標が「我が国及び世界の形成の歴史的過程と生活・文化の地域的特色についての理解と認識を深め、国際社会に主体的に生きる民主的、平和的な国家・社会の一員として必要な自覚と資質を養う。」とある。また科目別に見ると、地理Aでは「現代世界の地理的な諸課題を踏まえて考察し、現代世界の地理的認識を養うとともに、地理的な見方や考え方を培い、国際社会に主体的に生きる日本人としての自覚や資質を養う」とある。地理Bでは地理Aについての下線部が「地理的事象を系統地理的、地誌的に考察し」となっている。そして、地理A・地理Bともに幾つかの違いはあるものの、作業や体験的な学習を通して地理的なものの見方や考え方及び技能を身に付けさせるために、現代世界の地球的課題を

*1 名古屋市立長良中学校

*2 岐阜県立大垣西高等学校

主題学習的に取扱えるよう項目構成に工夫がなされている。

こういった学習指導要領に基づく新しい教科書を見ていくと今までに見られない特徴が幾つか見られた。地理 A については、「地理的スキルや見方・考え方の基礎」を身に付けさせる観点から随所に作業を行う設問が配置されている教科書が目についた。例えば N 社ではそのていねいな記述により生徒が主体的に自学自習する中で、十分に地理 A の目標を達成するように工夫されている。なお N 社では「地域調査」の項目において、具体例をもとに調査地の選定から報告書の作成までを簡潔明瞭に記載してある点も目を引いた。また、教科書に直接書き込みをする内容を 16カ所も盛り込んだ TO 社のような例も見られた。その他、生徒に興味関心を持たせ、学習内容を分かりやすくする観点から地理 B の教科書も含めて、全ての教科書で本文中の写真資料のカラー化と図表の多色刷りが進んでおり、従来の高校地理教科書のイメージを一変させている。

次に地理 B では、一見すると地理 A ほどには記述内容の変化がないものの、よく見ると生徒に学習の方向性を示すための幾つかの工夫が見られた。まず、K 社では各編や各章の冒頭に生徒に対して、学習の方向性を述べ、教科書に直接書き込む欄を幾つか設定している。N 社では、各章の冒頭に「地理的に考察することの視点」が述べられ、生徒に学習方法の基本的な考え方を示し、第 1 章の「現代世界の地誌的考察」では、国内外の各地域を例に調査の方法と地域を見る視点を学ばせ、調査結果を各地域にふさわしい形でまとめるということを通して、地理的な見方や考え方が自然と身に付くように工夫されている。TE 社では、「課題学習」を重視して、第 1 部(自然と生活)や第 2 部(グローバル化する現代世界)、第 3 部(地球的な課題)では各単元の冒頭に「課題」を提示して学習の目的や方向性を示している。第 4 部(世界の諸地域)では地域の調査方法と地域を見る方法について特に取り上げて、生徒が自学自習ができるように工夫されている。

以上をまとめると新しい地理の教科書の全体的特徴は、以下の 3 点に集約される。

- 1, 生徒の興味・関心を図る工夫が随所に見られる。(ピジュアル化、課題の設定)
- 2, 生徒の主体的な学習を図るべく、自学自習も可能な構成になっている。(従来の市販の参考書のような内容・構成に近い。資料の内容を目次に示したのものもある。)
- 3, 新学習指導要領が目指している「地理的なスキルや見方・考え方」が生徒の主体的な学習を通して自然と身に付くように工夫されている。

最後に、これまで述べてきた教科書の変化を受けて、現場ではどう対応していけばよいのか。まず高校に先駆けて進められた「総合学習」を本格的に学んだ生徒達が入学してくる中で、従来も根強くあった「教科書を教える」といった発想が強く見直しを求められ、「教科書を通して、学び方を学ぶ」という方向に変化してくると思う。ただ大学進学を主とする学校では、まだなかなか切替えが難しいのでは。今後は生徒の様々な実態を(特に入学時に)各学校ごとに把握する中で授業改善を図り、その中で新しい教科書をどう生かしていくのか。そして授業時間数が限られる中で、学ぶために必要な基礎知識を定着させ、更に自ら考え学ぶ生徒をどう育てていくかが問われるのではないかと考えている。

ワークショップ = メソッドによる地理的スキルの修得

- 柳ヶ瀬タウンウォッチングを通して -

安元彦心^{*1}

1. はじめに

地理的スキルは、生徒が自ら地理情報を収集して処理したり、自らの眼と手で地図を読図したり描図することで身に付けていくものである。本事例では、生徒がかような地理的スキルを修得するためには、どのようなスキル修得の場面を設定していけばいいのか、また地域調査で得られた地理的情報をどのように処理すればいいのか、さらにそれらの調査結果をより発展的に活用するためにはいかなる組織が必要であるか、鷺谷中学・高等学校の部活動「地歴サークル」(以下、本サークル)での地域調査を通じて提案したいと考える。

2. 調査地域の設定

授業や部活動において地域調査が実施できる場面は、生徒が実際に生活している「身近な地域」であろう。本事例では、岐阜市の中心市街地にある柳ヶ瀬商店街を調査対象として設定した。柳ヶ瀬商店街は、学校の南西 600m に位置する岐阜県内最大の繁華街であり、岐阜市の地場産業である繊維産業と密接な関係をもちながら発展してきた。現地調査の場所は、1時間程度という限られた調査時間を考えると、学校の近くにある「地理的な特性」を反映している場所を設定することにならざるを得ないのではなかろうか。

3. 地理的情報の処理

本事例では、まず柳ヶ瀬商店街の空洞化の実体を生徒に

*1 岐阜・鷺谷中学・高等学校

いかに把握させるか、が課題となった。事前指導で、岐阜市経済部が昭和50年から岐阜市中心市街地で調査してきた『歩行者調査報告書』のデータ分析を行い、調査ポイントに「メルサ岐阜店前」を選んだ。そして、平成12年12月、平成13年2月・6月の3回、前調査の確認調査というかたちで通行量調査と空き店舗調査を実施した。そこでの調査データを Excel を使用してグラフ処理を行い、通行量の特徴を確認した。とくに、平成11年の岐阜近鉄百貨店撤退以後の通行量の減少は、生徒にとって調査地である柳ヶ瀬の空洞化を実感する数字であった。

4. 調査結果の発展的活用

平成13年4月「ぎふまちづくりセンター」(岐阜市神田町)が発足したことを契機に、文部科学省「平成13年度生涯学習分野の NPO の連携によるまちづくり支援事業」の補助金を受け、同年7月に岐阜県民ホール未来会館で『若者まちづくりシンポジウム』が開催された。本サークルも先に述べた地域調査の研究成果を「柳ヶ瀬タウンウォッチング報告」という題目で発表した。この経験を通じて、生徒は日ごろ自分たちが行ってきた調査活動が、地域社会と深く結びついている実感を得たのであった。この中学・高校・大学の枠を超えた学校間コラボレーションは、個別の学校単位の部活動では得られない広い視野と新鮮な体験を生徒に与えてくれたのであった。その後、京都橘女子大学文化政策学部主健「第1回全国学生まちづくりインターゼミナール」でも発表の機会をいただいた。

このシンポジウムは、省みれば岐阜市中心市街地における“学生まちづくり元年”とも呼べるイベントであった。その後、平成14年4月に学生コラボレーション支援組織「学生まちネット」が発足し、同年7月開局のシティ FM 「FM わっち(78.5MHz)」において学生制作番組「まちであいユニバース」を担当させていただき、学生の調査研究活動やまちづくり活動の成果を地域に情報発信している。

5. まとめ

平成15年4月には「岐阜県高等学校文化連盟・地域研究部会」が発足する予定である。この部会は、学校の枠を超えた新たな共同研究のための組織づくりを目的としている。従来から地域調査を主たる目的とする部活動において、1校単位の地道な研究成果の蓄積はみられるものの、それらを統合してより広い視野で自分たちの調査研究と比較検討したり、各校での研究成果を地域コミュニティへ還元する試みはあまりなされてこなかったといえる。かような学校間コラボ

ションのための組織が構築されることで、生徒がより自分たちの生活する地域への関心を高め、身近な地域コミュニティと結びついたかたちで地理的技能を修得していく新たな「学習の場」が形成されていくことを期待したいものである。

地誌再考 - スケールによる地域の比較を通して -

白井正文^{*1}

1. 新学習指導要領 地理Bのめざすもの

“地理的知識と地理的な学び方の調和”

- ・目まぐるしく変化する現代を扱う科目地理にとって、単なる知識をもっているだけではすぐに陳腐化してしまうので、学び方も身につける必要がある。
- ・しっかりとした地理的知識を身につける必要がある。そのためには系統地理的・地誌的考察を行い、地域性や地域の特色を明らかにする。系統地理的・地誌的考察とは自然環境(地形・気候など)人口、産業、都市・村落、生活文化などの視点から地域を追求することである。
- ・だから地誌学習から地理的な学び方を学習する必要がある。

2. 地理的な学び方は地誌学習から

新学習指導要領の地理Bの「現代世界の地誌的考察」では、世界は大小様々な地域から構成され、それらが重層的になっているとある。そのため、それぞれの地域の規模によって取り上げるべき視点が異なってくると考えられる。その規模として、市町村、国家、州・大陸の3つを設定し、それぞれの規模での学習を通して地域性を総合的に理解する方法を学ぶことにねらいがある。

市町村規模の地域について

市町村規模の地域を授業で取り上げたのは野外調査(地域調査)のところだが、私自身あまり真剣に取り扱わなかった。生徒たちの多くが生活している地域なので資料収集、調査に都合が良い事はもちろん、地域を自分なりにイメージしやすく、さらに、実際の追体験もできるので、適当な規模である。さらに中学校で学んだ身近な地域の調査を踏まえることができ、一層地理的な学び方を身につけることができると考える。

(例)豊橋市の茶の(生産・流通・文化)について調べると

*1 愛知県立時習館高等学校

する。

・豊橋における茶の栽培はいつ、どこで始まったのか。現在の生産地はどこか。

資料:豊橋市史、豊橋市茶業組合への聞きとり、地形図(2万5千分の1)

・どのくらいの量が生産されているのか。生産量(生葉・荒茶)栽培面積、生産(販売)農家数

資料:愛知県・豊橋市の統計資料 例えば愛知県茶・工芸作物関係資料

・どのくらいの量の茶が市内に出回り、市外に出て行くのか。また、どのくらいの量の茶が、どこから市内に入っているのか。

資料:豊橋市茶業組合、農家への聞きとり、豊橋市内茶問屋・販売店への聞きとり

・豊橋市内は茶生産の適地であるのか。

資料:地質図、気象に関するデータ、愛知県農業総合試験場(豊橋)栽培実験

・豊橋市の茶道について

資料:豊橋市史、臨濟寺への聞きとり、日本の茶家(淡交社)

その他 愛知県茶業連合会(生産者)、愛知県茶商工業協同組合、豊茗会

(提案1)新学習指導要領では、市町村規模として学校所在地の地域ともう一つの地域を選ぶことになっているが、一つの市町村内の事象を例えば自然環境、農業、生活文化の観点から三つくらい取り上げれば、その市町村の様子が見えて

きて、他の市町村との関係が理解でき、地域を総合的に捉えることが可能となる。よって一つの地域だけを調べることで地理的な見方考え方もでき、地理的学び方も身につくと考える。

(提案2)都道府県単位の事象を取り上げて良いのではないか。 製造業出荷額全国一位

愛知県のように農業・製造業が盛んな地域では市町村だけを取り上げて全容が見えにくい。例えば輸送用機械(自動車工業)の工場は市町村を超えて分布し、部品等を製造する工場はもっと広く分散しているので大きな単位として県全体で取り上げたほうがより自動車工業の実態が見えてくるのではないか。(資料1)

国家規模の地域について

国家は国境によって区切られたまとまりのある地域なので面積、人口、貿易、人種、民族など複数の視点から追求することに意味がある規模である。そのため、資料が豊富に得られ、生徒達に少しでも関係のある、そして地理的捉え方に転移性のある国家を選ぶことが必要である。

(提案3)いくつかの教科書では、地域としてアフリカの国が取り扱われていないので、中部(西)アフリカを取り上げてみた。その中で1か国だけを取り上げるのではなく、よく似た自然環境の複数の国(ガーナ、ナイジェリア、コートジボアール)を比較することによって、それぞれの国の地域的特色を明らかにする。(資料2)

巡検報告：三重県伊勢・伊賀地域の歴史的景観と自然エネルギー（風力発電）

原 眞一^{*1}

日時 2003年4月20日(日)
コース テレビ塔前 白川入口 名古屋高速・東名阪自動車道 関IC *旧東海道・関宿 名阪国道(25号) *伊賀の里・モクモク手づくりファーム(農業公園)・昼食 *上野公園(上野城他) 国道165号 *久居榊原風力発電施設(青山高原) 国道165 *津一身田・寺内町 芸濃IC 伊勢・東名阪自動車道・名古屋高速 名駅出口 テレビ塔前(解散) *下車見学
案内者 山田正浩^{*2} 田中欣治^{*3} 中村 豊^{*4}
脇阪義和^{*5} 原 眞一

今回の巡検は前回と同様、雨のなか定刻の8時30分少し前にバスは、栄・テレビ塔下を出発して伊勢・伊賀路に向かった。都心部を通り若宮大通りの白川から名古屋高速を経て、名古屋西インターを通過し、東名阪自動車道に入った。山田会長の挨拶と今回のコースの概略と見学地のポイントの説明などが行われた。木曽川の架橋を跨ぎ三重県に入り、続いて長良川・揖斐川を渡るが、木曽三川の架橋からの養老山脈の景観も見えず、桑名市域を通過して行く。関宿までの車中では、山田、中村、原の各案内者と本日案内者に加わって頂きました田中先生から次のような説明が行われた。

三重県は、歴史的視点からみると東西日本の二大文化圏の漸移地帯にあたり、先進地域である畿内を中心とする西日本文化圏の前線である。また今日において、三重県は近畿地方であるのかそれとも東海地方であるのかははっきりしていないようである。伊勢国の鈴鹿山脈南端に位置する鈴鹿の関は、668年(天智7)に設置されたと推定され、越前の愛発、美濃の不破とともに古代三関の一つである要地であった。養老山脈と同じく東斜面が急峻の断層崖をなす傾動地塊の鈴鹿山脈山麓には扇状地などが形成され、同時に隆起した台地が帯状に広がる。その結果、山麓は保水性が弱く地上水の不足対策から、この地域ではマンボと呼ばれる独特な地下灌漑用水路がよく発達してきた。また、山麓周辺の

洪積台地上には茶(伊勢茶)栽培などが盛んである。静岡県牧ノ原台地の自然・農業景観とよく類似しているとの指摘もされなど、伊勢の中・北部の地形環境、土地利用、今日の道路事情と歴史的な道などについて説明が行われた。しかし、生憎の雨天で右手に南北に延びる鈴鹿山脈の山並みや山麓の遠景はまったく見えなかった。春の行楽シーズンの日曜日の朝の割には交通量もさほど多くない自動車道をパスは順調に走る。関インターを出て少し走り、JR関西本線を跨ぎ国道1号に進むと、まもなく最初の見学地である旧東海道・関宿の西追分の駐車場に9時30分前に着いた。雨は小降りになっていた。ここで下車し1時間余りおもしろいおもしろい小雨がぱらつく旧街道を自由に見学した。

近世、関宿は旧東海道53次の江戸から数えて47番目の宿場となる。宿場が整備されて以降、難所の鈴鹿峠を避けて、その南に位置する加太越えの大和(伊賀)街道と伊勢参りの伊勢別街道の分岐点でもあり、街道筋は大変賑わう。1843年(天保14)には家数632、人口1942人、本陣2、脇本陣2、旅籠42で東海道最大級の宿場として繁栄した。街道筋に連なる家屋の半数近くが江戸から明治初期の建造物を残す関宿は、街道唯一の往時の歴史的町並みの面影を今に伝えている。1980年、関町は「関宿伝統的建造物保存条例」を制定。さらに1984年、国の「重要伝統的建造物群保存地区」に選定された。保存地区は、鈴鹿川左岸の最上段の段丘面に沿っている。西の追分と東の追分間は約1.8km、25haにも及んでいる。保存地区は西から東へ新所・北裏(北側)・中町(南側)・木崎の4地区に分かれている。

関宿の西の入り口にあたる西の追分は東海道と大和街道の分岐点である。一方、東の追分は東海道と伊勢別街道の分岐点にあたり、伊勢神宮を遙拝する大鳥居がある。新町の街道沿いの東には、741年(天平13)、行基菩薩の開創と伝えられる国重要文化財の地蔵院がある。近郷の人々や街道を往く旅人の信仰を集め、門前町の機能も兼ねていた。今も多くの参拝者で賑わっている。関宿旅籠玉屋歴史資料

*1 愛知県立春日井高等学校

*2 愛知県立大学

*3 桜花学園大学

*4 名古屋経済大学

*5 東海高等学校

館や関まちなみ資料館などは見学スポットである。前者は関宿を代表する大旅籠の一つで江戸時代の貴重な旅籠建築物で、後者は伝統的町屋とともに公開されている。1890年(明治23)、関西鉄道(現JR関西線)が鈴鹿川の第2段丘上に開通。さらに参宮線も開通して宿駅の制度は失われ、宿場町としての機能は消滅した。



写真1 関宿の町並み

なお、関の地名は、鈴鹿関の所在地であったことに由来するが、その場所は不明である。関宿の地蔵院付近ではないかとも考えられている。鈴鹿峠越えの道は、都が京都へ移って以降、東国への主要道として発展していった。東の箱根と並び称された難所の鈴鹿峠越えに1926年(大正15)に遂道が完成し、その後1952年(昭和27)には国道1号が開通し、坂下・沓掛・関の集落を避けてバイパスも開通した。さらに1965年、南部丘陵地帯に内陸後進地域の開発目的のため、三重県亀山市と奈良県天理市を結ぶ全国最初の無料ハイウェイである名阪国道が走り、平均2.4kmごとにインターチェンジが設けられた。また、これに通じる東西の名阪自動車道が開通して本格的な自動車交通時代を迎えた。このようにして当地域周辺の道路事情も大きく変貌していった。

1980年、関町当局が町広報で「町並みはみんなのものである」をモットに「売らない」「貸さない」「壊さない」の三ない運動を提唱し、旧街道の町並みの歴史的景観を活かしたまちづくりののりだし、1982年7月には第5回全国町並みゼミも当地で開催された。町並み保存整備が本格化していった。1995年(平成7)、「歴史国道」に選定(建設省)。1997年には「東海道53次シンポジウム関宿大会」が開催された。今日、歴史的町並みの観光地としても広く知られ訪ねる人も多い。庇・格子・屋根など町屋の表情を見ながら歩いてみた。

関宿は国道1号とJR関西本線とともに非常に接近している。関宿のほぼ中央部の南近くに関駅があり、駅舎は関宿ふるさと会館にもなっている。その西側の国道沿いには観光案内所と特産物販売などを兼ねた「道の駅」関宿も設けられてい

る。この道の駅に集合して関宿を後にした。

少し名阪国道を西に進み、約30分ほど走って次の昼食を兼ねた見学地である「伊賀の里・モクモク手づくりファーム」に11時頃に到着した。園内にはバーベキューなど数ヶ所のレストランやハム工房など、また出入り口周辺には「モクモクショップ」「農村料理もくもく」「野天もくもくの湯」の各施設もある。厚く雨雲がたれこむ空模様にもかかわらず、結構、来園者も多く賑わいを見せていた。広場などに放し飼いの豚も見られた。好みのところで食事を楽しみ、園内の施設を少し見ながらバスに戻った。

この農事組合法人である施設は、1988年にできた地元の農産物を加工し販売する工房のある農業公園である。この公園がある阿山町は、三重県の北西部に位置し滋賀県に接する緩やかな山間の人口約8500人ほどの小さな町である。「内発創造型アグリビジネスへの挑戦—農業で生活できる経済拠点づくりをめざして—」をスローガンに掲げている。娯楽中心の農業公園とはその性格を異にして、多様でユニークな取り組みに挑戦していることで関係者には全国的にも注目されている。この地域はもともと稲作と畜産が中心のまちで、人口流出や高齢化、後継者などの問題を抱えた普通の農村であった。



写真2 伊賀の里

事業の経緯を少し記しておく。1983年に地元の養豚農家が銘柄豚「伊賀豚」として起業を始めたのが発端である。87年には養豚農家19名を中心に農事組合法人「伊賀銘柄豚振興組合」を設立。翌88年ハム工房で創業。95年に東海3県ではじめて地ビール工房の創業開始。96年地麦パン工房、パスタ工房開始。同年「朝日農業賞」受賞。職員数180名(職員90名、パート90名、2000年)。現在、生産者と消費者が共に学び、共に農業の価値を認識し、生活スタイルをつくりあげる共生の時期として捉え、生産の場づくり、加工の場づくり、交流の場づくりを柱とする新フードシステムづくりを

より推進している。これらを通して地域農業の再生に取り組み農村の活性化を図っている。現在、「農」の提供と「食」の提供に対する明確なコンセプトの明確化という高い事業理念を掲げ、モクモクブランドの確立を目指している。多くのことを広域に発信している。その魅力ある企画力・事業力が地域農業を大きく活かしたのである。今後の動きにも注目してみたい。雑木林に囲まれた体験型の農業公園を 12 時 30 分過ぎ出発した。

近畿内陸の断層湖盆地の一つである上野盆地(伊賀盆地)を東から西に進み、伊賀地域の中心都市で松尾芭蕉ゆかりの俳諧の聖地でもある上野市(人口約 6.3 万人)中心部にある上野公園に向かう。この北西部の盆地底付近の水系は西方大阪湾に注ぐ淀川上流の一つの水系地域にあたる。盆地の北側の断層線に沿って木津川とJR関西線が並行している。市街地の北はずれに関西線伊賀上野駅があり、南には名阪国道(国道 25 号)が走る。30 分足らずで上野市街の上野城下にある上野公園の市営駐車場に到着。

上野公園内には白鳳城ともよばれる白亜三層の美しい上野城と芭蕉翁記念館・俳聖殿の施設がある。最初、1585(天正 13)に筒井定次が現在地に城郭を築くが、その後1606年(慶長 11)、城下は大火に見舞われた。1608年(慶長 13)徳川家康に信頼の厚かった藤堂高虎が、定次の城郭を大改修し碁盤目状の城下町の建設にとりかかった。1967年国指定史跡に指定された現在の城郭は、1935年(昭和 10)に建立された。盆地の北西で旧市街の北側に広がる洪積台地末端部の 180 m の高台に位置する。西側の内濠には日本一を誇る約 30 m の高さの石塁が築かれている。上野城は戦国末期から江戸期への過渡期にあたり、大坂を標的にした要害の地に築城された平山城であることを物語っている。

公園前の道路南には近鉄伊賀線の上野駅がある。このあたりに官公庁などが集まって市の中心部を形成している。近鉄伊賀線はJR関西線伊賀上野駅と近鉄大阪線伊賀神戸駅とを結び伊賀盆地を南北に延びている。上野駅の地下道をくぐり、さびれた狭いアーケードのある商店街を通り、旧市街に足を運んでみる。大和街道の宿場町の機能を兼ねる東西に延びる本町筋やその南側に続く二之町通り・二之町通りからなる三筋町界隈は特権商人街として配置された街区である。東部の南北に寺町の通りがある。三筋町界隈を急ぎ足でまわって旧城下町の様相を垣間みた。現在、市当局は地域地活性化に立ち上がり、「城下町まるごと博物館」・タウンマネジメント(TMO)の構想などに基づき、まちのアイデンティティを探りつついくつかの事業に着手している。

JR関西線の前身である名古屋・大阪間を最短距離で結ぶ

関西鉄道は、1897年(明治 30)に開通したが、伊賀上野駅は市街地から北に約 3 km 離れた地点に開設された。その結果、鉄道駅から離れた市街地は、その後、長期にわたって市街地の拡大・発展が停滞し、旧城下の町並みの面影を今に残している。1965年の名阪国道開通を契機として、沿道には工場の進出がみられ、また「南部開発」といわれる伊賀盆地の南部や名張地域は、住宅開発が進み、大阪圏のペットタウンの遠隔地域の前線としての機能を有するようになった。

上野公園から市街地を北から南へと通り過ぎ国道 165 号に入り青山高原に向け東進。車中で伊賀上野の組紐や清酒を中心に地場産業について田中氏が説明された。古代より歴史を有する伊賀の組紐は、1976年、国の伝統的工芸品に指定されている。大和と伊勢を結ぶ主要街道の一つであった参宮表街道(初瀬街道)にほぼ沿って走る。雨がまた本降りになり、遠望がきかなくなる。青山トンネルの入り口近くから国道 165 号とわかれ県道青山高原公園線に入る。「関西の軽井沢」と称される青山高原を 30 分ほど上がっていく。脇阪委員からこの地域の風力発電立地の環境などの説明が行われた。標高 842 m の笠取山頂近くにある久居市営の久居榊原風力発電施設の展示室を兼ねた管理棟正面に 15 時前に到着。途中、相変わらず降り続けていた雨は高原ではより強くなり、まったくの悪天候に見舞われ、目の前の視界すらほとんどきかないほどである。肝心の高原にまわる風車群の姿も見えず、近くではその姿がほんのかすかに見える程度であった。天気がよければ風車群の壮大な姿と美しい新緑に映える高原周辺の眺望も楽しむことができずはまずであると思うと大変残念である。この周辺は東海道遊歩道のハイキングコースにもなっている。少し休憩して出発した。

今日、自然エネルギーへの関心が急速に高まり、有力な地域エネルギーとしての風力発電が目玉され拡大している。風力発電事業の成立条件に、風況、道路事情、送電事情の 3 つの条件が必須であるといわれる。この笠取山周辺はこの 3 条件を満たしている。第 1 条件の風況は自然条件である。国内有数の強風地帯で日本海から低地の若狭湾、琵琶湖を通り伊勢湾に抜ける「風の道」にあたり、年間約 10 か月はこの北西風が吹く好条件の地形・気候要因がある。

の条件はおもに建設コストである。道路事情は、国道から笠取山にいたる道路は、かつての有料道路の県道が整備、新たに資材を運ぶ道路建設の必要性はなく、さらに送電事情であるが、近くの航空自衛隊笠取分屯基地からの送電系統との連係を可能にした。

久居市は風力発電を地方分権時代に即するまちおこしの指針も兼ねて、大規模集合型風力発電所の建設に取り組み、1998年2月に国内最大級の出力を誇る風車 4 基

(750kw × 4)の工事を着手。久居市は通産省(当時)の第1号の補助制度適用を受け、1999年5月に竣工する。4号基付近を「やすらぎの丘」と命名。一般家庭消費電力量に換算すれば全世界の約16%にあたる。そのうえCO₂の削減率も4.7%で、地域のエネルギーと環境に大いに貢献。その後、第3セクターの(株)青山ウインドファームによりさらに一気に20基(久居市側8基、大山田村12基)1400kwの風力発電が建設され今春の3月下旬に完成。また、今春より2年間事業で「風と遊ぼう」と自然エネルギーを紹介する体験資料館建設を、久居市西部の名泉・柳原温泉街の一角に建設する。2年後にさらに10基が中部電力グループにより設置される。2002年には家庭用電力需要100%を目指し、「久居市新エネルギービジョン」策定。久居市の地域新エネルギーの積極的な導入と市内・市民・企業の環境意識の高揚を図り、短期・中期・長期の目標を掲げ取り組んでいる。高原に林立する巨大な風力発電施設はクリーンエネルギー導入のランドマークとともに新たな観光資源として地域の活性化につながると期待がかかる。



写真3 津一身田・寺内町の外濠

高原から伊勢平野へ降りてやっと雨も止む。バスは久居市街を通過し、国道23号を走り津市街西部を北に進む。JR紀勢線一身田駅北側の線路を横切るとすぐ一身田の高田専修寺西側の駐車場に到着。途中約1時間かかって16時10分過ぎになった。50分余りこの寺内町を探訪する。専修寺南側の唐門をくぐり境内に入と正面が如来堂。境内を東へ向かい御影堂を通過して三層の太鼓門を出て寺内町の町並みを歩く。

もともと鎌倉時代の初期に親鸞が関東の布教の中心であった下野(現栃木県)の高田の地に浄土真宗の布教拠点に高田門徒を形成。16世紀に専修寺が戦火で荒廃したことに、この一身田に15世紀後期に建設された無量寿院(後の一身田専修寺)が高田専修寺に変わり、この地が高田教

団の中心となった。その後寺内町として発展する。

一身田・寺内町は津市北部を流れる志登茂川とその南を流れる毛無川に挟まれ、海拔3m前後の氾濫原にある。寺内町の平面形態は、東西500m、南北450m程で面積は約20haである。東・西・北側には幅約5mの堀が巡らされ、南は毛無川を堀とし、周囲に環濠を構えている。専修寺の南側が寺町である。その南の東西に旧伊勢別街道が通る向拝筋境界にあたる。この境界が寺内町の町並みの中心となっている。江戸時代の寛延年間(1748-1750)には環濠内には町屋約100軒百姓家20軒、橋向に約50軒の集落があった。1888年(明治21)には戸数453戸、人口2032人規模の集落を構成していた。

寺内町の西の入り口である桜門跡には安楽橋がかかり、京方面への出入口である。また北東部には江戸への出入口にあたる地点に赤門跡がある。さらに伊勢方面の出入口にあたる黒門跡がある。江戸時代には三ヶ所に橋が架けられ夜間は出入が禁じられていた。往時の面影を醸し出す蔵のある環濠沿いの歴史的な町並みも歩いてみた。

ところで寺内町は、「15世紀末から16世紀末にかけて、主として浄土真宗寺院を中心として計画的に形成された宗教都市。寺社の門前に自然発生的に形成された門前町とは、その明確な計画性の点で異なる。(略)多くの寺内町には、町の周囲に土塁・堀が築かれ、囲郭都市としての景観を有し、また寺内特権を獲得したのもも存在した」(『最新地理学用語事典(改訂版)』大明堂、2003年)と記されている。天野太郎は、「囲郭は寺内町の特徴の一つであるものの必要条件ではない。また機能に関しても、宗教的な側面がより強く内在しており、防衛という観点からみても本願寺系寺内町以外ではその傾向は薄くなると指摘している。」(天野太郎「寺内町概念と囲郭の機能」、地域と環境1、P.41、1999年)と指摘する。

寺内町は大きく次の三つに分類される。(1)寺院側の完全な主導によって出来たもの。(2)有力豪族・大名の寄進・門徒化によるもの。(3)門徒集団による土地の買得並びに一定区画の占拠によるもの。これによると一身田は専修寺の主導によってできたもので、(1)に分類できる。一身田の地名の由来やその成立期さらに寺内町の類型などについても興味が多く、また一身田周辺は条理制地割の遺構をよくとどめている地域でもある。

最後の見学地の一身田を後にして、一路、伊勢自動車道から東名阪自動車道を経て名古屋テレビ塔へ。車中では参加者の自己紹介や近況などが交わされ、最後に田中先より挨拶が行われ、ほぼ予定時刻の夕刻6時30分過ぎに到着。悪天候であったが無事終了。感謝!